

法然教学における善導觀の推位について

坪 井 俊 映

法然上人の新浄土宗義の提唱は、恵心僧都の往生要集の流れをくむ天台浄土教より善導の本願念仏の思想に転信したところにあると考えられる。しかし、この善導教学への転信が四十八卷伝等の諸伝にある如く、承安五年、四十三才の時に帰入され、直ちに一向専修の身となり、選択本願の新念仏義を提唱されたと理解することは出来ない。それは、法然上人の青年時代より壮年——晩年になって思想信仰が次々に進み、深くなつて終に選択本願義の提唱となり、一向専修の行者となられたと考える方が妥当なように思われる。法然上人の思想信仰が深化して行く過程に、いくつかの段階があり、その最後の到達点が一向専念主義であろうと思うのである。

法然上人の思想信仰の推位過程を見るにあつて、困難なことは研究資料となる多くの著書、語録のうち、著作年次の明確なものが少なく、語録のごときはほとんどいつてもよい程いつ頃のものか明瞭になつていないことである。法然滅後その語録を集録した望西楼了恵が拾遺和語灯録卷下(浄全九・六五六頁)の終りに「しかるに世中に黒谷の御作という文おほし、いわゆる決定往生行業抄……。をよそ二十余年のあいだ、あまねく花夷をたづね、くはしく真偽をあきらめて、これを取捨すといえども、なをあやまる事おゝからん、後賢かならずたゝすべし、又

おつるところの真書あらばこの拾遺に続くへし」とある如く、法然滅後約七十年にして法然の名を借る偽書が相当数存在していたことを伝えており、また法然滅後分派した各派において、所伝の著書語録に相当数の改竄加筆された処が見られる等の事情より考えて、法然上人の著されたもの、書かれたもののすべてに亘つて真実のものが把握し難い現在においては、法然教学形成の推位を見ることは困難なことである。それで今は、これらの事情のうちにおいて確実に法然上人の著作と信ぜられる往生要集釈と三部経釈と選択集とよりて法然上人が善導に対していかに考えていられたか、その考の相違推位の後を見んとするのである。

法然上人の往生要集に関する釈書に四本あつて、法然上人全集（石井教道博士編）には往生要集詮要、往生要集料簡、往生要集略料簡、往生要集釈の四が収録されている。内容は大体同じものであるがこれらの往生要集の釈書がいつ頃著わされたものか明確ではない。袋中の選択之伝（浄全八・六八頁）によると「有鈔」にいうとして「後白河の保元三年、関白忠通公諸宗の碩学を集めて、五十五箇月往生要集を講ぜしむ、法然^{二十}講説最勝なるが故に智慧才一の誉を得る（原漢文）」とある説が往生要集講説の一番若い説である。袋中は「有鈔」にいうとして、その出典を記述しないから、何によつてかゝる説を立てたか明らかでない。四巻伝、九巻伝、四十八巻伝等によると、法然は二十四才の時、嵯峨釈迦堂に参籠して後、「南都に学匠を問う」とあるから、二十六才の法然は未だ修学時代であつて、各宗の碩学と肩を並べて講義をするにはあまりに若すぎるきらいがある。また袋中の選択之伝の説は誇張に富んだ表現をしているから、二十六才で現存の往生要集の釈書が出来たと考えるには無理がある。次に往生要集の講述を伝える記事は、四十八巻伝に承安四年、四十二才の時、後白河法皇に往生要集を講じ

たという記事である。この他の諸伝記には該書講述の記事が二一三散見されるが、年次については明らかでない。この四十八巻伝について、田村円澄氏は中沢見明氏の説に賛同して、法然上人伝の研究」においてこの伝記の記述は全然信用することが出来ないとされている。されば、この説に従う限り四十二才、後白河法皇に対する往生要集講述説も疑わなければならない。

然し、この往生要集の釈書は、その内容より見て法然の比較的若い頃のものと思われる。それは、往生要集は觀勝称劣の立場にあつて、觀念的浄土教を説くのが主意であるが、この法然の釈書である往生要集詮要、往生要集釈を見ると「往生要集の意、称名念仏を以て往生の至要となす」と説いている。しかしこれには無量寿經釈の如く仏の本願に関する説明がない。また往生要集の冠頭に出る「但顯密教法其文非一」事理業因其行惟多、利智精進之人未_レ為_レ難如予頑魯者豈敢矣、是故依_二念仏一門_一聊集_二經論要文_一」とい文における、恵心の劣機愚惡の自覺に對しても、なんの比判も見ることが出来ない。その他法然教義の特色と見られる持戒雜行、菩提心廢捨、念仏易勝、還愚痴等に関する考えの片鱗をも見ることが出来ない。それで、この釈書は著作年次は明瞭にすることが出来ないが内容より考えて、三經釈や選択集と同じ頃の述作とすることは出来ない、凡らく、それ以前のものと考えて。しかのみならず、法然の浄土教成立が恵心の往生要集の浄土教より転信して善導觀經疏の浄土教に歸入されたところにあると考える。き、この往生要集釈書は多くの法然の著書語録の中で、一番初めに著わされたものと考えて差支えないであろう。そこで、この往生要集の釈書では、善導をいかに見ているかという点、往生要集料簡に「私云、恵心_レ尽_レ理定_二往生得否_一以_二善導和尚專修雜行文_一為_二指南_一又処々多引_二用彼師釈_一可_レ見_二然則用_二恵心_一之輩必_レ可_レ歸_二善導_一哉」とある。往

生要集詮要等の他の釈書も同じ意趣の文を出しているが、この釈書では、恵心僧都の先輩先達として善導を見ており、往生要集に指南を与えた人と見ていただけで、あつて、選択集の如き善導観は見出すことは出来ない。

選択集にては「偏依善導一師」というのみでなく、終りに「靜以善導、觀經疏者是西方指南行者目足也……爾者可謂此疏是彌陀直說ナリ云」とあつて、善導を彌陀の化身とあがめるばかりでなく、觀經疏をもつて彌陀仏の「直説の疏」としている。従つて往生要集の釈書制作時代の善導観と選択集のそれとは、大きなへだたりのあるのを知ることが出来る。

されば善導の本願念仏に大なる注意を払い、善導思想を全面的に受け入れたのはいつ頃であらうかと思うに、著述の上においては三経釈にその後を見るのである。

三経釈のうち、阿彌陀経釈はその奥書に「文治六年（法然五十八才）二月一日、於東大寺講之、所請源空上人能請重賢上人」とあり、また觀經釈は奥書を見ると阿彌陀経釈をされた翌日、二月二日に講述をされた様である。無量寿経釈は奥書がないから講述年次が不明であるが、凡らくこの前後にされたと見て差支えないであらう。九卷伝、四十八卷伝によると建久二年（五十九才）に東大寺大仏殿にて觀經曼荼羅、浄土五祖像を供養して浄土三部経を講ずとなつてゐるから、奥書と伝記との間に一年の相違があるが、この他に法然上人が三部経を講義された年次を伝えるものがないから、現存の三部経釈は凡らくこの頃に講義をされたものである。この三部経釈の題号の下に「善導によつて愚懷を述ぶ」とか、「諸師解釈多と雖も、今正く善導に依り、傍ら諸師の釈によつて善導を補助す」とか書かれていて、善導の釈書（五部九卷、その中般舟讃を除く）の考えを基礎として、浄土三部経を解釈しているのである。

その中において恵心の往生要集も引用されているが、釈義の基礎は善導の念仏思想であつて、無量寿經釈の如きは「善導釈云」または「善導云」として三十六回も善導の章疏を引用している。しかのみならず觀經釈には華嚴、天台、真言等の諸師は浄土の章疏を造るけれども聖道をもつて宗として、浄土をもつて宗とせず、善導一師のみ浄土を宗とする故に「偏依^二善導一師也^一」と明瞭に善導に依ると釈義の立場をあかしている。

このように法然上人が浄土三部經を解釈された立場は善導の考えを基とされたのであつて、三經釈には多くの經疏が引用されているが、往生要集の考えは中心とされていない。「偏依善導一師」なる語は、この三經釈において初めて出る言葉であつて、それ以前の著作である往生要集の釈書には見ることが出来ないものである。

而て、石井教道博士の「選択集の研究」総論篇によると、この三經釈は選択集述作以前ののものであつて、これを整理したものが選択集（六十六才述）であるという。選択集には、この「偏依善導一師」なる語がそのまゝ継承されているが、しかしこの書にては善導は彌陀の化身なりと仰がれて、善導を神格（仏格）化していられるのである。かくの如く四十二才の往生要集釈書（四十八卷伝の説）五十八才の三部經釈と六十六才の選択集とに現われた善導觀を見るに、それぞれ異なる善導觀が現われているのであつて、こゝに法然上人の善導觀推位の一端が伺われる。